

〈プログラム〉

○開会の辞(13:30) 郎

欧米言語文化学会会長 植月惠一

○研究発表(13:40~14:30)

司会 日本大学専任講師 近藤 直樹

「— 破滅的な過去と脆弱な未来 —

『パリの家』で描かれる囚われた大人たちと明敏な子どもたち」

東北女子大学准教授 杉本久美子

○シャーロット・ブロンテ生誕200周年記念シンポジウム(14:45~16:45)

司会 甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

「Charlotte Brontë と Harriet Martineau: 心の表象をめぐって」

発題者 桜美林大学人文学系准教授 大竹麻衣子

「Villetteにおけるプロテスタントとカトリック」

発題者 甲南大学非常勤講師 吉田 一穂

「教室で「見る」英文学 —『ジェイン・エア』を中心に—」

発題者 早稲田大学非常勤講師 田村 裕二

○総会(第30回通常総会 17:00~17:30)

司会 欧米言語文化学会幹事長 水野 隆之

・本部活動報告

水野 隆之

・関西支部活動報告

歐米言語文化学会幹事・関西支部幹事補佐 吉田 一穂

・会計報告

歐米言語文化学会会計局長 近藤 直樹

○閉会の辞(17:30)

欧米言語文化学会監査役 加賀 岳彦

○懇親会(18:00~20:00)

於 イタリアン・カフェ PEACE(ピース) 会費4,000円

〒176-0004 東京都練馬区小竹町1-57-2 TEL 03-5966-1567

アクセス：江古田駅北口から右に進み（日芸に向かって）最初の交差点を左に曲がってすぐです。または大学を出た信号交差点を北に上がってすぐです（江古田駅から108m）。

研究発表要旨

「— 破滅的な過去と脆弱な未来 —

『パリの家』で描かれる囚われた大人たちと明敏な子どもたち」

杉本 久美子

エリザベス・ボウエン(Elizabeth Bowen, 1899-1973)の『パリの家』(The House in Paris, 1935)は、現在・過去・現在の3部構成となっている。その中でも第2部の「過去」で描き出される登場人物たちの相関関係と恋愛模様を支配するのは、マダム・フィッシャーの悪魔的影響力であり、また彼女の影響力によって生み出された過去の記憶である。作中では過去の記憶と出来事が循環され、大人たちはその循環に囚われている。過去の循環の悲劇性を際立たせているのは「現在」で描かれるレオポルド少年であるが、同時に彼と傍観的少女ヘンリエッタの交流はこの作品に微かな希望を与えるものとなっている。循環する過去と大人、そして子どもたちの描写を通してこの作品で示される脆弱な未来について考察したい。

シャーロット・ブロンテ生誕200周年記念シンポジウム

2016年は、シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë, 1816-1855)の生誕の年から数えて丁度200年目に当たる。この節目の年に何か出来ないかと発題者3人で相談した結果、このシンポジウムを企画する運びとなった。

発表要旨を一瞥すれば分かるように、3人の発題者の問題意識は全く異なるものである。だが、3人の問題意識が異なるとは言っても、シャーロット・ブロンテの作品に対して真摯に取り組もうとする情熱は共有しているつもりである。

生誕200年という記念すべき年に、シャーロット・ブロンテが触媒となり、活発な議論の化学反応が起こるとすれば、冥府にいるこの作家も喜んでくれるに違いない。

「Charlotte Brontë と Harriet Martineau: 心の表象をめぐって」

大竹 麻衣子

シャーロット・ブロンテとハリエット・マーティノウの間に、文通や訪問を通じた私的な交流があったことは知られているが、作家としての両者の間に何らかの影響関係や類似、対照を読み取ろうとする試みはこれまであまりなされてこなかった。ともにヴィクトリア朝を代表する女性作家であるものの、一方は小説、他方はノンフィクションという互いに異なるジャンルを活動領域としていた印象が強いためだろう。しかし、二人の交流の発端はブロンテからマーティノウに送られた一通の手紙であり、その中でブロンテはマーティノウの小説*Deerbrook* (1839)から多くを学んだと明言している。このことからも二人の交流は創作上の影響をはらむものだったといえる。

本発表は、二人の執筆活動におけるジャンルをまたいだ共通点として、同時代の心理学と結びついた心の仕組みに対する关心や、個人の内面生活を描くことへのこだわりがあることに注目する。心とその表象についての二人の考え方がいかに「似て非なるもの」であったかを検証することで、二人の作家としての姿勢や信念を明らかにすると同時に、まさにそれらがそれぞれの作品の限界や可能性につながっていたことを示したい。

「Villetteにおけるプロテstantとカトリック」

吉田 一穂

Villette (1853)は、刊行されたシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) の4作品の中の最後の作品である。シャーロットは、1851年3月に*Villette*を書き始めた。彼女は1852年11月に*Villette*を書き終え、作品は1853年1月28日にスミス・エルダー・アンド・カンパニー (Smith, Elder & Co.) によって出版された。

*Villette*は、自伝的要素が強く、シャーロットのブリュッセル留学時代の体験が色濃く反映された作品と考えられている。このような自伝的要素が強い*Villette*は、*Jane Eyre* (1847) と類似する部分を持ちながらも、ヒロインの取り扱いに相違点がある。両者の相違点として決定的なことは、ジェインほどにルーシーは男性を強く求めていないことだ。ルーシーには〈女性が一人で生きていくこと〉に対する強い意識が見られる。彼女のアイデンティティを考えるとき、プロテstantとしてのアイデンティティを無視することはできない。

「教室で「見る」英文学 —『ジェイン・エア』を中心に—」

田村 裕二

映画を教材として用いるというのは、別段目新しいアプローチではない。映画を題材にした教科書や学習書が少なからず出版されている事実がそのことを裏付けているだろう。

映像作品には、学生の視聴覚に訴える効果があり、リスニング力を高める利点がある。とは言え、ただ映像を流すだけの安易な授業は、無論、絶対に避けなければならない。

本発表では、『ジェイン・エア』および他の文学作品の映画版を取り上げながら、学習効果を高めるためにどのような準備をし、どのような工夫をすべきかを具体的に考えてみたい。